

柏川修一編

談義本集

一

古典文庫

柏川修一編

談義本集

一

古典文庫

古典文庫第五七六冊

平成六年十一月二十日印刷発行

非売品

編者 柏川修一

発行者 吉田幸一

印刷者 共立印刷株式会社

製本者 (有)武蔵製本

集本義談

一

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話〇三(三九一〇)二七一七
振替口座〇〇一九〇一九一四五九七番

目次

一 教訓雜長持 五卷五冊 宝曆二年刊……………五

二 教訓差出口 五卷五冊 宝曆十二年刊……………一五五

三 楚古良探 五卷合一冊 明和五年刊……………三三五

解説……………柏川修一……………四三一

凡例

一、伊藤単朴の作品は、五種判明している。順次翻刻する予定であるが、これまで、三種が未翻刻である。既翻刻も改めて、初板本を底本として翻刻した。一、翻刻については、次の方針をとった。

1、初板原本の面目を保つことにつとめ、本文は全て、原文通りとした。
2、漢字の異体・略体文字・合字・古字の表記は、概ね現行の活字体に従った。また、おどり字「ㄣ」は「タ」に改めた。例えば次の通りである。

ㄣ↓より	取↓最	早↓畢	柳↓柳	など
𠂔↓事	𠂔↓靈	𠂔↓兒	𠂔↓往	
哥↓歌	𠂔↓笑	𠂔↓候		
𠂔↓嘩	𠂔↓寢	𠂔↓雜	𠂔↓雜	

3、誤字、脱字、仮名遣いの誤り、衍字（乗^り）なども、原文のまゝとし、誤字には（ママ）と附した。

4、句点は原本通りとし、私に読点、を施した。

5、原本における表裏の改頁は、（ ）を以って示し、丁数とオ・ウとを、小字で入れて、註記とした。

6、挿絵の箇所は「挿絵」とし、丁数・表裏を記し、挿絵は近くに挿入した。

7、原本の改行のほかに、私に改行を多くした。

8、会話は、原則として、「」『』を附した。

9、挿絵は、全て収録した。改刻本の挿絵は、解題のあとに附した。

10、改刻本との本文の相違は、解題に記した。

一、巻末に、収録作品の解題を行なった。解題は、書誌的な説明を主としたるも、備考として、私見を記した。

一、原本の閲覧、利用につき、成田山仏教図書館、国立国会図書館、秋葉直樹先生、大阪府立中之島図書館、都立中央図書館、くにたち中央図書館、たましん地域文化財団歴史資料室などより多大の御配慮を賜わった。常日頃より御指導を頂いている朝倉治彦先生にも心より感謝申し上げる。

一

教訓雜長持

五卷五冊

宝曆二年刊

教訓雜長持

卷一

序 九

海鹿の九藏天狗に逢ひし事 三

卷二

大天狗藪医者を教戒し給ふ事 三六

卷三

浅草寺に奴集り主人を評議せし事 六二

卷四

遍参僧精靈に出会し事……………九九

卷五

鉢坊主身の上を懺悔せし事……………一二五

福神の教を受けて金持と成りし事……………一三八

きやうくんぞうながもち
教訓雜長持序

昔むかしの人の調布てづくりを讀よめる。玉河ほとりの辺すんに住すんて。汲鮎くみあゆの若盛わかさかりより。今いま、汲鮎くみあゆの老おいの秋迄あき。耕たが耘やし勤きんの閑ひまにハ。平仮名ひらかなの草紙くさしを、友ともとし。飢来うへきたれハ、麦飯ばくはんを喫きつし。困きんし来きは、鼻はなに櫓やぐらの午睡ひるねの正中ただなか。旦那寺だんなの雛僧こぞうが動起ゆすりおこして。江都土産きとみやげの新板物しんばんぶつあり。眠ねふりをさませ」と和尚おしやうの口上くちやう。半なかばハ、夢ゆめで聞きこながら。目めを摺摩すりすり、取とて見みれば。教訓下手談義きやうくんへただんぎと題たいせり。教訓おしへの二字にあじ二にオうれハ。人ひとに益えきなき物ものにハ、あらじと。枕おしを推おしやり、熟じゆく閱みハ。先まづ、開卷かいくわん第一義だいいぎが。吾住庵わがすむいほの隣在となりざい所に。臙翁さいおうと云いふ、老人おやじを設もふけて。前篇ぜんへんに、子息むすこを教おしへ。後篇ごへんに、手代てだいを諭さとし。或あるひハ、江えの島しまの神詫しんたぐに。淫曲いんきよくを

戒め。退トが講訳に、浮説の惑を弁じ。安売の引札に、潜上を諫。農
夫商賈の子弟に。怠惰を励し。驕を諷ぜし教諭の眞実。寓言の中よ
り、誠をあらはし。鼓舞自在成筆の働き。此叟等が及ふ所に非、とい
へ共。いてや、西施が顰に（二ウ）
ならひて。彼坊が説残せしを。里の童や、江戸の所縁の少年等が、お
しへにせばや、と。其詞の卑俚も恥す。他人の誹笑も、かへり見ず。
心にうかひ。口へ出る俣。後前しらすの、差別なしに。手に任せて、
取込ぬれば。雑長持とハ、名付つれど、何程似爲ても。静観房が作意
に似ざれハ。鵜の真似する鳥が。壬申の秋の寢覚に。耄たりなど。
見ゆるし給へ（二オ）

武州多摩郡青柳の老圃

宝曆二年秋八月望日

七十三翁伊藤单朴（三ウ）

きやうくんぞうながもち
教訓雜長持卷第一

青柳散人 単朴述

○海^{ひじき}鹿^{てんぐ}の九藏^あ天狗^{ひし}に逢^しひし事

十六夜^{いさよい}の日記^にに。遠江^{ひくま}国^{しゆく}。引間^{ひくま}の宿^{しゆく}とあるハ。今の浜松^{はままつ}の町^{まち}をいふとぞ。むかしく、此^こ所に。海^{ひじき}鹿^{てんぐ}の九藏^あと云者^{いへ}、住^すける。其家^{いへ}富^とて。何の不足^{ふそく}なき身^みながら。心飽^{あく}まで邪^{よこしま}にして。己^{おの}が勝手^{かて}のミ思^{おも}ひ。理^りを非にまげても。手前^{てまへ}へ取^と込^こむ算^{さん}(二オ)用^{もち}ばかりして。義理^{ぎり}とハ。馬鹿^{ばか}のするわざ。瓢箪^{ひやうたん}とハ、駒^{こま}の寝所^{ねど}と心得^{こころえ}。他人^{たにん}の難儀^{なんぎ}ハ。怪我^{けが}にも、氣^きの

毒と思はず。己さへ損せねハ。他人ハ、倒やうが。潰やうが。夫ハ、
其方の物すきから、と。そしり嘲る、強欲者。近年中風の下拵にや。
両足ふらくとして。からくり人形の、歩行やうなれば。狗脊に似た
物じや、とて。海鹿とハ、異名を付ける。類を以て友とするハ。古今
かハらす。同氣相求るならひ、海鹿が、貪欲の相談相手。土器坂の喜
作と(二ウ)

て。野鉄炮な親仁ありけり。一とせ、関東下向の。公家衆御通りと
て。本陣、問屋など、いふ者ども。大路に平伏してありし中に。此親
仁を、御乗物の内より。御まねき遊ばし。「此あたりに。引佐細江とい
ふ。名所あるべし、何所のほどぞ。案内せよ」と、仰けれバ。喜作、
とんきやう成る声を上て「イヤ爰許に。引佐名字を名乗ります者は。一

人もござりませぬ。まして、細右衛門と申、目医者ハ、曾て(二オ)覚が御座りませぬ。若、目医者が、御用に御座りませば。隣村に、清庵と申がア、いかる上手で御座ります」と。いはせもはてず。御側の衆中。「だまれ」。目医者の御尋でハない。旧跡の御尋じや」といはれて「イヤ休々と申ハ。碁打で、ござりましたが。網打に出て。大きな石へ打かけ。はねても、切ても、とればこそ。征に懸て、せんかたなく。とび込めました。岩の端さまで、腰を打て。今ハいざり(二ウ)同前、何の役に立ませぬ。」「イヤそれハ聞ハせぬ。これややい。引佐細江といふ所ハ。あなた方の。御歌に、遊ハさるゝ所じやによつての御尋。惣じて、歌にも詩にも。詠ずる所を。名所とも、旧跡とも、いふハヤイ。あほうな奴じや」と、叱り付られ。「所にハ、すミ候へども。